研究ノート

スペインの「大航海」の資金調達

――一六世紀の国際金融史における南ドイツとスペイン（その一）――

諸田　實

目　次

はじめに
Ⅰ　コロンブスの西インド大航海
Ⅱ　その他の西インド大航海
Ⅲ　モルッカ諸島への大航海
Ⅳ　スペインの「大航海」の転機

はじめに

一四九二年一〇月一二日、五週間余の航海ののちにコロンブスがグアナハーニ島（サン・サルバドール島）に到着してから、一九九二年はちょうど五〇〇年目に当たっている。これを機会にコロンブス自身についても、コロンブスをはじめとするスペインの「大航海」についてもさまざまな事実が明らかにされ、また、それが及ぼした影

響やその意味がさまざまな視点から問いなおされている。本稿で取り上げる「大航海」の資金調達という問題もその一つといってよいであろう。

周知のように、生産の集積を基礎とする大規模な産業経営の成立も、多額の設備投資を必要とする資本構成の高度化も一般に進んでいなかった当時においては、長期間の大洋航海を必要とする東インド貿易やアメリカ貿易はとりわけ多額の資金を必要とする大事業であった。長期間の航海に耐える船舶の調達、船長と水先案内人、多数の乗組員の確保、長期間の食料と飲料、現地で交易する商品の買付け、などに多額の資金を必要としたことは容易に想像できる。コロンブスやマゼランなどの名前で知られるスペインの「大航海」の資金はどのように調達されたのであろうか。スペイン（カスティーリャ）人以外の外国人の資金はどのような形で、どの程度入っていたのであろうか。資金調達というスペインの「大航海」のいわば台所を調べることは、「大航海」を一六世紀のヨーロッパの国際金融ないし国際経済の関連の中に位置づけて捉えるためには、困難ではあっても不可欠の作業であろう。

但し、実のところ筆者はスペインの「大航海」についても、一六世紀のスペイン史についても専門外であり、一六世紀の国際金融で活躍し、特に巨額の貸付け（公信用）によってスペインの王室とも関係の深い南ドイツの商人フッガー家についてこれまで勉強を続けてきたにすぎない。したがって、以下の小稿は、スペインの「大航海」や一六世紀のスペイン史については専門家の研究に全面的に頼り、故ケレンベンツ教授の論文を手がかりにして、[1] 南ドイツの側からみたスペインの「大航海」との関わりを明らかにしようと試みたノートである。ドイツの経済史家の中でも、フッガー研究を通して一六世紀の南ドイツとスペインとの関連の重要性を指摘していたのはケレンベンツ教授であった。そこで本論に入る前に、南ドイツの商業のスペインとの関わりを一瞥しておこう。[2]

一六世紀のヨーロッパは宗教改革の激動の時代であったが、その中で南ドイツ商人の財力（「貨幣権力」Geldmächte）が国際商業の分野でも国際金融の分野でも重要な役割を果したことは、南ドイツ商人を代表するフッガー家の名前をとって、この時代が経済史上「フッガー家の時代」（das Zeitalter der Fugger）と呼ばれていることからも明らかであろう。[3] アウクスブルクとニュルンベルクをはじめ南ドイツ諸都市の商人は、すでに一五世紀にはドイツ各地ばかりか、東はティロール、ケルンテン、スロヴァキア、ハンガリー、ポーランドと広く東ヨーロッパに、北はネーデルランドからバルト海の商業圏に、南はアルプスを越えてイタリアの諸都市にまで活動の手を伸ばしていたが、国土回復運動（レコンキスタ）が進むイベリア半島も彼らの活動と無縁ではなかった。[4]

イベリア半島の東部の諸都市、バルセロナ、サラゴサ、ヴァレンシアなどには、一五世紀にはすでにかなりの数の南ドイツの商人が進出して、サフランをはじめ砂糖、果物、絹、グラナ（染料）など、スペインや地中海地域の特産物を買付けていた。南ドイツ製の麻織物を販売し、これらの特産物を買付けていた「大ラーフェンスブルク会社」の活動はその代表的なものである。[5] アウクスブルクのヴェルザー会社もサラゴサに支店を開設していた。[6] しかし、半島の東部、アラゴン王国の諸都市での商品取引は、カスティーリャの興隆と南部アンダルシア地方を起点とする中南米やカナリア諸島との交易に押されて、一六世紀にはしだいに重要性を失っていった。

大航海時代が始まると、イベリア半島に向ける南ドイツ商人の関心はしだいに大西洋岸に移り、ポルトガルの東インド貿易の根拠地リスボンとスペイン（カスティーリャ）のアメリカ貿易の根拠地セビーリャには南ドイツ商人の支店や代理店、居留地が形成された。このうち、南ドイツの商人が最初に進出したのはポルトガルのリスボンであった。ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を回ってインド西海岸のカリカットに到達したのは一四九八年であるが、すでに一五〇三年二月にはヴェルザー＝フォェーリン会社の委託をうけたシモン・ザイツ

(Simon Seitz) がエマヌエル国王と協約を結んで、ドイツ人に対して支店開設の許可と東洋の産品の取引の免税措置を獲得した。翌一五〇四年八月にはヴェルザー会社の代理人ルーカス・レム (Lukas Rem) が国王と新たな協約を結び、リスボンに代理店をもつ南ドイツの商人に対して、東インド貿易に直接参加し、次の航海に彼ら自身の計算で代表者を乗り組ませ、交易品を船積みする許可を獲得した。この協約にもとづいて、一五〇五年の東インド貿易（第七商船隊）には南ドイツの商人団がイタリア商人とともに参加して一七割五分の利益をあげたという。(7)

しかし、南ドイツの商人が東インド貿易に直接参加したのはこの時が一回だけであり、ポルトガルの香辛料取引の中心もアントウェルペンに移ったので、一五一〇年代にはリスボン支店は重要性を失うことになる。

これに対して、スペイン（カスティーリャ）の大航海はどのようにして始まり、また、その資金調達に南ドイツの商人はどのように関わっていたのであろうか。これが本稿の課題である。

(1) H. Kellenbenz, Die Finanzierung der Spanischen Entdeckungen, in: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Bd. 69. 1982. この問題に関連するケレンベンツの論文はたくさんあるが、そのつど記すことにする。

(2) H. Kellenbenz, Deutschland und Spanien. Wege, Träger und Güter des Handelsaustauschs, in: Ders., *Europa, Raum wirtschaftlicher Begegnung. Kleine Schriften I*,1991 (Beiheft 92 zu *VSWG.*) の II, Die oberdeutschen Wirtschaftsbeziehungen zu Spanien bis ins 17. Jahrhundert.

(3) R. Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*. 2 Bde., 1896.

(4) 南ドイツの諸都市のうち、ニュルンベルクの商人はすでに一四世紀にフランドル、ブラバント、イギリス、イタリア（ヴェネツィア、ミラノ、ジェノヴァ）、ウィーン、プラハ、ポーランドで活動し、一三三二年には七二の都市で商業上の特権を獲得していた。アウクスブルクの商人も一四世紀にフランドル、ブラバント、ヴェネツィア、ウィーン、プラハ、ポーランドで確認されている。拙稿「一六、一七世紀中東部ドイツ麻織物工業におけるツンフトカウフ」（『商経論叢』一六―四）、拙著『フッガー家の遺産』（有斐閣、一九八九年）。

（5）「大ラーフェンスブルク会社」（Die Große Ravensburger Handelsgesellschaft）はムントプラット、フンピス、モェッテリの三家族が結合して生まれた会社で、南ドイツの帝国自由都市ラーフェンスブルクを本拠に、六年間の会社契約を二五回更新して一三八〇年から一五三〇年まで一五〇年間活動を続けた。一五〇〇年頃には、ベルン、ジュネーヴ、リヨン、アヴィニヨン、マルセーユ、ミラノ、ジェノヴァ、バルセロナ、ヴァレンシア、アントウェルペン、ケルン、ニュルンベルク、ウィーン、ブタペスト、フランクフルト・アム・マイン、アーヘンに支店を開設したり、代理店を置いたりしていた。A.Schulte, *Die Große Ravensburger Handelsgesellschaft 1380—1530*, 3 Bde., 1923. 大塚久雄『株式会社発生史論』（『著作集』岩波書店、第一巻）後編第一章第二節。クーリッシェル『ヨーロッパ中世経済史』（増田四郎監修、伊藤栄、諸田實訳、東洋経済新報社、一九七四年）四六五ページ以下。

（6）ヴェルザー家はアウクスブルクの都市貴族の家柄で、一四七三年に四人の兄弟が会社を結成、メミンゲンの商人フォェーリンと結んで隆盛に向かった。フッガー会社が社員を一族の成人男子に限り、封建的権力者相手の金融業を積極的に行なったのに対して、ヴェルザー会社の社員には一族以外の者も多数含まれ（一五〇八年に一八人、同年フッガーは兄弟二人）、商品取引に重点をおいていた。ニュルンベルク、フライブルク、ダンツィヒ、アントウェルペン、チューリッヒ、ジュネーブ、ベルン、リヨン、ヴェネツィア、ミラノ、ローマ、サラゴサ、リスボンに支店を開設し、スペイン、ポルトガルの商業に積極的で、ヴェネズエラに植民地を作った会社としても知られている。一六一四年に破産。R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd. 1, S. 193f.

（7）一五〇五年三月ポルトガル国王は一九隻の船をインドに派遣したが、この時、ドイツとイタリアの商人は独自の資金で三隻の船を同行させた。この「三隻に船載せられたるもの」は全額六万五四〇〇ドゥカード、そのうちイタリア人が二万九四〇〇ドゥカード、ドイツ人が三万六〇〇〇ドゥカード、また、ドイツ人の内訳はヴェルザー・フォェーリン会社が二万、フッガー会社が四〇〇〇、ヘーヒシュテッターが四〇〇〇、ゴッセンブロートが三〇〇〇、イムホフが三〇〇〇、ヒルスフォーゲルが二〇〇〇ドゥカードで最後の二人がニュルンベルクの商人、他はアウクスブルクの商人である。大塚久雄、前掲書、後編第一章第一節。K. Häbler, *Die Geschichte der Fugger'schen Handlung in Spanien*, 1897, S. 21 f.

I　コロンブスの西インド大航海

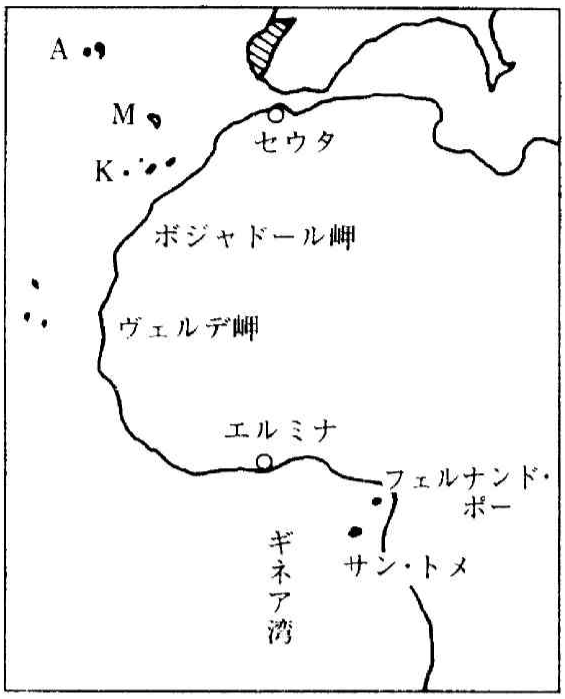
コロンブスの西インド（インディアス）大航海（一四九二／九三年）とヴァスコ・ダ・ガマの東インド大航海（一四九七／九八年）が行われるまで、アフリカ西海岸と大西洋上の諸島への進出において先頭に立っていたのはポルトガルであった。ポルトガルはセウタの占領（一四一五年）を皮切りに、ボジャドール岬（一四三六）とヴェルデ岬（一四四四年）を越えて、エルミナ、フェルナンド・ポー、サン・トメなど、ギネア湾に拠点を確保する一方、マディラ諸島（一四一九年）、アソレス諸島（一四二七―三三年）、アルギム島（一四四三年）、ヴェルデ岬諸島（一四五六―五八年）を次々と手中に収めた。これに対してスペイン（カスティーリャ）はグラナダの征服に全力を注いでいたために、この方面ではカナリア諸島（一四七九年）を領有しただけであった。

一四七九年にアルカソヴァス条約を結んで両王国が布教と征服の領域の分割に合意した時、ギネアとマディラ、アソレス、ヴェルデ岬諸島（とFez王国）はポルトガルに、カナリア諸島はスペインに属した。これが、コロンブスが歴史の舞台に登場する頃の状況であった。

コロンブスと彼の大航海についてはすでにくわしく知られているので、かんたんに述べるにとどめよう。(1) コロンブスは一四五一年にジェノヴァの毛織物商の息子として生まれたが、西インド大航海以前にも何度か航海をしている。最初は一四七四年のキオス島（エーゲ海の島で当時ジェノヴァ領）への航海で、この時はジェノヴァの有力な商人スピノラ（Spinola）家とディ・ネグロ（Di Negro）家が船〔の艤装資金？〕を提供してくれた。このあと同じくジェノヴァの有力な実業家チェントリオーネ（Centurione）家に雇われたり、ジェノヴァの船隊に乗り組んだりして、一四七六年から八五年までポルトガルで過ごした。その間、一四七八年にディ・ネグロ家の仕事でマ

ディラ島へ砂糖の買いつけに行き、翌年ここでピアチェンツァ〔の貴族〕出身のペレストレーロ家の娘フェリパと結婚する。一四八二年か八三年にアフリカ西海岸ギネア湾の交易城館サン・ジョルジェ・ダ・ミナへの航海もしている。[2] その直後の一四八三年末か八四年初めに西方への大航海の計画をポルトガル国王ジョアン二世に提出したが、断わられて翌八五年ティント川沿いの小港パロス（スペイン＝カスティーリャ領でギネアへの航海の拠点）に移った。

スペインへ移ってからも、彼は西方への大航海の成功の見込みについて確信をもち続け、ポルトガル王室に何度も働きかけたり、また、弟のバルトロメをイギリスとフランスの宮廷に派遣したりしているが、いずれも成果はなかった。これと同時に、今度はスペインの宮廷にも西方への大航海の計画をもちかけた。スペインでは計画を検討する委員会の審議に手間どっていたのが、一四九二年の年頭にグラナダが陥落すると、一転してカスティーリャ国王（スペイン国王であるカトリック両王の一人）イサベルの翻意、交渉の再開と進み、三か月後（一四九二年四月一七日）に「サンタ・フェの協約」が成立する。この間の劇的な経過についてはよく知られている。[3]



A：アソレス諸島
M：マディラ諸島
K：カナリア諸島

コロンブスの第一回大航海（一四九二年八月三日―一四九三年三月一五日）は三隻の小船隊――サンタ・マリア号は一〇〇～一二〇積載トンのナウ船、ニーニャ号とピンタ号は六〇積載トンと八〇積載トン

のカラヴェル船――で行なわれ、参加者も九〇人と小規模であった。この航海に必要な資金二〇〇万マラベディ（約五三三三ドゥカード）は次のようにして調達されたことが判っている。[4] まず、アラゴン王国の財務官ルイス・デ・サンタンヘル（Luis de Santángel）とジェノヴァ人フランチェスコ・ピネリ（Francesco Pinelli）が一四〇万マラベディを提供した。二人はアラゴンのサンタ・エルマンダーという警察組織の金庫を管理していたので、[5] そこから捻出したのであろう。サンタンヘル家はカラタユド出身のユダヤ系改宗者で、ルイスはヴァレンシアで生まれ、地代収入を担保とする金融業を営んでいた。のちにバルセロナに移ってジェノヴァ人の実業家と共同で事業を行い、アラゴン国王フェルナンドの財務官になった。彼は一四九二年一月にイサベル女王に「劇的な翻意」を うながして、コロンブスの大航海を実現させた陰の人物であり、ヴァレンシアにいた頃にピネリと知り合ったと思われる。ピネリはカナリア諸島の征服に参加したことがある。チェントリオーネ兄弟の一人クリストフォロ（ヴァレンシア商人）とピネリ家のベニトは一四八三年以来、サンタンヘルの仲介でフェルナンド国王に貸付を行う金融業者であった。

残りの六〇万マラベディのうち三五万マラベディもサンタンヘルがアラゴンの国庫から支出し、二五万マラベディはコロンブスの名前で、しかし実際にはピネリとつながりのあるジェノヴァ人やその他のイタリア人から借金して調達した。[6] このように、コロンブスの大航海の実現には、国王から大航海の許可を獲得する点についても、大航海に必要な資金の調達についても、アラゴン国王（スペイン国王であるカトリック両王の一人）フェルナンドの側近のグループ、ユダヤ系改宗者、ジェノヴァ人の商人・銀行家がそれぞれ大きな役割を果たしていた。[7]

コロンブスはインディアスへの大航海を全部で四回行なったが、あとの三回の大航海の資金についてはくわしい金額は判らない。しかし、第二回の大航海（一四九三―九六年）は、第一回の大航海からコロンブスが無事に帰還

したために、資金の調達も乗組員の募集も比較的容易に進んだ。ナオ船三隻とカラヴェル船一四隻、合計一七隻の大船団で、参加者も一五〇〇人といわれる。この第二回の大航海には教会の関与がいちじるしく、特にトロ生まれで当時セビーリャの助祭長だった実力者のファン・ロドリゲス・デ・フォンセカ（Juan Rodriguez de Fonseca）師が船団の艤装費用の大部分を引受けている。その他の事業の資金は、前述のフランチェスコ・ピネリがジアノット・ベラルディ（注（6）参照）と共同で調達した。この航海では大小六〇ばかりの島を「発見」したが、目標の大陸に到達することはできず、事業としては失敗であった。この失敗でコロンブスの後援者も資金の提供をためらい、フォンセカ師のコロンブスを見る目も厳しくなった。

第三回の大航海（一四九八―一五〇〇年）はカラヴェル船五隻とナオ船一隻の船団で出航したが、この時には恐らくスペイン人の他にジェノヴァ人が資金を提供したようである。第四回の大航海（一五〇二―〇四年）はカラヴェル船四隻の小船団で、そのうち一隻の船長はジェノヴァ人バルトロメオ・フィエスキ（Bartholomeo Fieschi）であった。この時にもジェノヴァ人が資金を提供したのであろう。この間にスペイン王室は民間人に対するインディアス航海の禁止を解除したので、一四九五年に最初の航海が企てられた。コロンブスは第二回大航海から帰ってからこの解禁措置に異議を申し立てて、いったんは独占事業（『カトリック両王＝コロンブス商会』による王室直営独占事業方式」青木康征）に戻すことに成功した。しかし、王室はコロンブスに与えた特権を損ねないという条件で、一四九七年に再び解禁したので、以後、主としてスペイン南部アンダルシア地方の人々によって多数のインディアス（西インド）大航海が行なわれた。[8] ラモスのいう「発見と交換の航海」（„viajes de descubrimiento y rescate"）、パドロンやヴィグネラスのいう「アンダルシア人の航海」（„viajes andaluces"）の時代が始まった。

(1) コロンブスと彼の大航海に関する参考文献は数えきれないが、専門家の手になる一般向けの名著として次の二冊をあげるにとどめる。増田義郎『コロンブス』(岩波新書、一九七九年)、青木康征『コロンブス。大航海時代の起業家』(中公新書、一九八九年)

(2) 青木、前掲書、四ページ。

(3) 増田、前掲書、三九ページ以下。こうした劇的な展開と船や船員の調達(航海の実現)には多くの人物の力が合成されていた。増田氏はラ・ラビダ修道院長フワン・ペレス・デ・マルチェーナ神父とセビーリャのアントニオ・デ・マルチェーナ神父の尽力、ならびに、コロンブスの計画を検討する委員会を主宰したフライ・エルナンド・デ・タラベーラ(改宗者で初代グラナダ司教になった)と委員会のメンバーの一人ディエゴ・デ・デサ(改宗者でドミニコ会士)の役割に注目している。青木氏は船と乗組員の募集についてコロンブスを助けたピンソン兄弟の役割を強調して、「コロンブスの第一回航海はカトリック両王とラビダ修道院をバックにしてパロスに乗り込んできたよそ者コロンブスと、航海の現場を担う船乗りたちの人望をあつめる地元の実力者ピンソンとが対峙するという緊張した関係を秘めて進行していく。」と述べている。前掲書、二九―三三ページ。ケレンベンツは、コロンブスがスペイン王室の財政担当者に接近することができたのはチェントリオーネ家とつながりがあったためではないか、と述べている。チェントリオーネ兄弟では、クリストフォロがヴァレンシアの商人、マルチノがグラナダの銀行経営者、ガスパルがセビーリャの銀行所有者、メルヒオールがカディスの商人であった。

(4) 以下の金額はケレンベンツによるが、異説もある。増田、前掲書、四一ページ、青木、前掲書三三ページ以下参照。

(5) サンタ・エルマンダーは道路の通行安全などを管理する警察組織で、一四七六年に発足した。

(6) このイタリア人の中に恐らく、セビーリャでメディチ家の代理商をしていたフィレンツェの商人ジァノット・ベラルディ(Juanoto Berardi)が含まれていた。

(7) 「サンタ・フェの協約」のお膳立てをしたのはフェルナンドの秘書フアン・デ・コローマだと言われている。なお、改宗者(コンベルソ)(ユダヤ教からキリスト教に改宗した新キリスト教徒)の果たした大きな役割については、増田、前掲書、一三七ページ以下を参照。

(8) この間の経緯については、青木、前掲書、第四章、特に一六八ページ以下にくわしい説明がある。

II　その他の西インド大航海

コロンブスがインディアスの島へ初めて到達して、しかも無事に帰還したことは、それが「黄金の国」ジパングではなかったとしても、スペインの航海者や資産家に一攫千金の夢を与えた。第二回の大航海が第一回と較べてはるかに大規模な編成（二隻→一七隻、九〇人→一、五〇〇人）で、しかも僅か三か月後に行なわれたことからも判る。しかし、その後エスパニョーラ島の状況について悪評が伝えられ、インディアスへの渡航の自由化を求める動きと、王室を後楯にしてインディアス事業の独占と特権を守ろうとするコロンブスとの対立があって、結局、王室の共同事業でない（王室が共同出資者にならない）、民間人によるインディアス大航海が行なわれたのは、コロンブスの第三回の大航海から「インディアス通商院」（Casa de la Contratación）の創設（一五〇三年）までの間であった。これらの航海は「多数の航海」、「アンダルシア人の航海」、「発見と交換の航海」などと呼ばれている。

この新しい局面を開いたのは、前記のフィレンツェ人ベラルディが一四九五年四月に王室との間に結んだ契約（アシエント）であった。[1] しかし、ベラルディは同年末に死んだので、この契約は実行されなかった。ベラルディ商会の番頭で遺言執行人となった同郷人のアメリゴ・ヴェスプッチ（Amérigo Vespucci）が翌年初めに航海を企てたが、カディス湾で船が破損したために失敗した。ヴェスプッチはこのあと航海家として成功するが、「アメリカ新大陸」「アメリカ新世界」という呼称は、『新世界』（一五〇三年）という彼の書簡本に由来しているという。[2]

一四九九年から一五〇〇年にかけて企てられた大航海の資金調達については不明な点が多い。航海の許可は航海家自身が、王室の代理人として航海を取りしきっていた実力者のフォンセカ師と結んだ契約によって与えられ、資金は一般に航海家が調達したようである。

以下、この間の航海を箇条書きに記そう。

(1)　アロンソ・デ・オヘーダ（Alonso de Hojeda）の航海。オヘーダはクエンカの出身でコロンブスの第二回航海に参加したことがあるが、この時はメディナセリ侯に仕えてプエルト・デ・サンタ・マリアにいたので、一四九九年五月にここから出航した。この航海の資金の出所は不明であるが、オヘーダにはヴェスプッチとファン・デ・ラ・コーサ（Juan de la Cosa, スペイン北部サントナ出身）が同行した。翌年六月に帰還。エメラルドの産出場所を発見して獲得した航海として知られ、以後、王室はこのコクイバコア地域への渡航を禁止して、独占を図った。

(2)　ペロ・アロンソ・ニーニョ（Pero Alonso Niño）の航海。ニーニョはモグエル出身であるが、資金が不足していたためであろう、セビーリャ郊外トリアナで航海用の乾パンを製造していたゲーラ家の三兄弟と組んだ。長兄のルイス・ゲーラは銀行業を営なんでおり、航海には末弟のクリストーバル・ゲーラ（Cristobal Guerra）が参加して、一四九九年六月にティント川を出航、翌年四月に帰還した。一四九八年つまりコロンブスの第三回航海以来、ヴェネズエラ沿岸のクバグア島とマルガリータ島で真珠のとれることが知られており、ニーニョはコロンブスの第一次と第三次航海に参加してそのことを知っていたので、この時には真珠をたくさん持ち帰った。

(3)　ジャネス・ピンソン（Yañez Pinzón）の航海。コロンブスの第一次航海の際に船の調達や船員の募集を助けた地元パロスの有力者、前記ピンソンの弟で、第一次航海に参加した。今回はピンソンと甥（アリアス・ペレスとディエゴ・フェルナンデス・コルメネーロ）が資金を出し、不足分は外部資金も受けいれた。成功を期待して王室は成果の五分の一を留保した。一四九九年末にティント川を出航してブラジル（アマゾン川）に達したが、ブラジル蘇方（すおう）と準宝石を持ち帰っただけで、帰国後、債権者との間に争いが続いたという。

(4)　ディエゴ・デ・レペ（Diego de Lepe）の航海。彼はパロスの出身であるが船乗りの経験がなかったので、コ

ロンブスの航海に参加したことのあるバルトロメ・ロルダン（Bartolomé Roldán）と組んで、一五〇〇年一月末にセビーリャを出航した。この航海も経済的には成果がなく、借金で航海の準備をしたレペは、帰国後パロスの債権者に責めたてられたということである。

(5)　アロンソ・ベレス・デ・メンドーサ（Alonso Vélez de Mendoza）とルイス・ゲーラの航海。ルイスは前記ゲーラ三兄弟の長兄で、一行は二隻の小船団で一五〇〇年夏にセビーリャを出航した。

(6)　クリストーバル・ゲーラの航海。前年ニーニョと組んでたくさんの真珠を持ち帰ったゲーラは、一五〇〇年八月初めふたたび大航海に出た。この航海には王室が資金を提供した。

(7)　ロドリゴ・デ・バスティーダス（Rodrigo de Bastidas）の航海。一五〇一年六月以降（一二月？）に出発したこの航海には、著名な航海者ファン・デ・ラ・コーサ（Juan de la Cosa）やヴァスコ・ヌネス・デ・バルボア、アンドレス・モラレスも参加している。この航海については資金調達が判っている。航海の費用は全部で三七万七〇〇〇マラベディ（約一〇〇五ドゥカード）で、出資者は二〇人、その大部分はセビーリャの人間であった。毛織物商人が三人含まれ、その一人アルフォンソ・ロドリゲスが最高額の五万マラベディ（約一三三ドゥカード）を出資した。高額の出資者ではカルキア・ペレス・デ・カブレラとファン・デ・レデスマが四万マラベディずつ、ディエゴ・デ・アロ（Diego de Haro）が三万五〇〇〇マラベディ、その他は二万五〇〇〇～一万マラベディであった。セビーリャ人以外ではジェノヴァ人ルイス・デ・ネグロニ（一万四〇〇〇マラベディ）と並んで、特に、前記のブルゴスの商人ディエゴ・デ・アロが加わっている点が注目される。アロはアントウェルペンで活動していたブルゴス商人の代表格で、後述するように、弟のクリストーバルと協力してスペインのモルッカ大航海の資金調達に重要な役割を演じた。[3] この時には恐らく、このバスティーダスとコーサの航海の準備のためにセビーリャに滞在し

ていたと思われるが、いずれにしても、ブルゴスの商人が大航海の資金調達に参加したことを示す事例である。

(8) ディエゴ・デ・レペとディエゴ・ロドリゲス・デ・ラ・メスキータ（Diego Rodrigues de la Mezquita）の航海。デ・レペは前年にロルダンと組んで航海に試みて成果をあげなかったが、今度はトリアナの富裕な船主の息子メスキータと組んで、五隻の船隊で一五〇一年に出航した。出資者は主としてセビーリャの商人であった。

(9) アロンソ・デ・オヘーダの航海。オヘーダはフアン・デ・ベルガーラ、ガルシア・デ・カンポスとともに一五〇二年に第二回の航海に出た。この航海の資金もセビーリャの商人が出した。オヘーダはさらに一五〇五年にも第三回の航海を企てたが、この時には資金調達に難渋したといわれる。

一五〇四年にアメリカ（西インド）貿易が解禁されたので、エスパニョーラ島での交易に対する商人の関心は高まった。一五〇三年セビーリャに「インディアス通商院」が創設され[4]、アメリカ貿易の根拠地がセビーリャに限られたので、スペイン人にとってはセビーリャとアメリカの間を航海する船の艤装と商品取引が中心問題であった。これに対して、ジェノヴァ人をはじめ外国資本は主として海上貸借（Seedarlehen）[5]に向かった。

ディエゴ・ニクエサ（Diego Nicuesa）の航海。ニクエサは一五〇八年六月にブルゴスで、オヘーダの名前で協約を結んだ。当初の目的はエスパニョーラ島での商品取引であったが、商品の船積みを終えたあとで発見の航海が追加された。八人の出資者が一八〇万マラベディを拠出したが、外国人のアメリゴ・ヴェスプッチが一人で一〇万マラベディを出している。これに対して、用船の費用は八人のジェノヴァ人と一人のイギリス人が出した。

一五〇八年から一五一〇年までの間の航海に海上貸借の形式で提供（調達）された用船の資金については、エンリケ・オルテ（Enrique Orte）の研究が明らかにしている。一五〇八年までの三三隻の船の中では、外国人の船はジェノヴァ人フランチェスコ・スピノラの船が一隻だけであった。しかし、担保をとった海上貸借ではジェノ

ヴァ人の資金の優勢が増した。この時期に六〇人のスペイン人が合計八〇〇〇ドゥカードを出したのに対して、ジェノヴァ人は一七人で八三〇〇ドゥカードを出している。[6] ジェノヴァ人の資金の優越は船積みする商品に対する動産貸付でも明らかである。一五〇九年には約四〇人のスペイン人が出した資金およそ四二〇〇ドゥカードに対して、ジェノヴァ人の資金は一三人でおよそ四五〇〇ドゥカードであった。[7] 前年に二一隻の船がサント・ドミンゴの海域で嵐にあって難破したので、ジェノヴァ人には危険の多いアメリカ航海よりも四五～五〇％の収益をあげる海上貸借の方が確実だと考えられたのであろう。

コロンブスをはじめとするスペイン人からの西インドへの大航海にもかかわらず、インディアス航海がスペインに金銀の獲得という満足すべき経済的効果をもたらさなかったのに、その間に、事態は急速に変化していた。一四九八年にヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を回ってインド西海岸カリカット（カレクーテ）に到着して以来、ポルトガルがインドから大量の香辛料を獲得し始めたのである。ちなみに、ポルトガルは一五〇三年に「インド庁」(Casa de India) を設けて東インド貿易を王室の独占事業とし、一五〇八年にアントウェルペンに「インド庁」の支所を設けてヨーロッパの香辛料取引の中心とし、その一方、一五〇九年にディウ沖でイスラム海軍を破って翌一〇年にゴアを、一一年にマラッカを占領する。こうして香辛料獲得の競争ではポルトガルがスペインに一歩先んじることになった。ヨーロッパにおける香辛料（胡椒）の取引市場は一五〇〇～一五一〇年間にこれまでのヴェネツィア（とジェノヴァ）からリスボンとアントウェルペンへ移ったといわれる。[8] ポルトガル船の運んだ香辛料がアントウェルペンに初めて陸揚げされたのは一五〇一年であった。

このようなポルトガルの成功とリスボンの繁栄がスペイン（カスティーリャ）を促して、香辛料の地を求めて香辛料の島モルッカ諸島への西回りの航海を始めさせたことは当然であった。西回りで香辛料の地へ到達するため

には、アメリカ新大陸の東海岸を探査して南海（Mar del Sur）、すなわち太平洋へ通ずる水路を発見することが差し当っての目標であった。フェルナンド国王は、コロンブスが第四回航海の目標としていた海峡探索の着想を彼の死後に取り上げ、著名な航海者を集めて会議を開き、一五〇八年にこのブルゴス会議の決議にもとづいて新たな目標をもった大航海が企てられた。こうして、スペインの大航海の歴史の次の一章である「モルッカ大航海」の時代が開始された。

（1）ベラルディの提案とその後の経緯については、青木、前掲書、一六四ページ以下を参照。

（2）青木、前掲書、一四〇ページ以下。

（3）デ・アロ兄弟については次節で説明する。

（4）「インディアス通商院」の初代総裁は、コロンブスの第一回航海の資金を調達したジェノヴァ人フランチェスコ・ピネリである。

（5）クーリッシェルは海上保険の起源を、ブルーダーシャフトやギルドのような相互扶助団体で生まれた「大海損」（grosse Haverei）と、被保険者と保険者とが相互に対立している「海上貸借」との両方に求めている。海上貸借は古代からすでに行なわれており、船が無事に航海を完了しなかった場合、貸主は利子のみでなく元金の払戻しに対する請求権ももたなかった。航海が無事に成功した際に受け取った利子は、四五～五〇％と他の普通の利子以上に高かった。クーリッシェル『ヨーロッパ中世経済史』四九〇ページ以下、五四三ページ以下。この場合には、ジェノヴァ人がスペイン人に資金を貸付け、スペイン人がその資金を使って航海（貿易）に出資したケースが含まれているのではないかと思われる。また、資本家（保険業者）が航海の前に船主や荷主から保険料に当る金額を借りておいて、海難が起これば返済し、無事に帰れば返済しない、という海上保険の形式も行なわれていたかもしれない。海上保険法の原型はバルセロナ（一四三五年）、ブルゴス（一五三八年）、セビーリャ（一五五六年）、ビルバオ（一五六〇年）に成立していたといわれる。葛城照三『海上保険講義要綱』（早稲田大学出版部、一九七三）、加藤由作『海上保険新講』（春秋社、一九六〇）

（6）ジェノヴァ人の中にはベルナルド・グリマルディがおり、その他スピノラ、ピネリ、チェントリオーネ、カタネオ、

アドルノ、ドーリアなどの姓をもつ者が含まれていた。

（7）一三人のジェノヴァ人のうち最高額を出したのはジャコモ・デ・グリマルディであった。

（8）ポルトガルの東インド貿易の開始によってヴェネツィアの香辛料取引は一時的に大打撃を受けたが、やがて回復し、一六世紀後半には両者はほぼ拮抗していた。

Ⅲ　モルッカ諸島への大航海

ブルゴスで会議が開かれた一五〇八年の三月に、会議の出席者であるソリスとピンソンは西回りモルッカ大航海の協約を結んだが、この時は成功しなかった。六月に同じような協約を結んだオヘーダとニエクサはこれにもとづいて探検の航海に出発して、一五一〇年に南米北岸（Tierra Firme）に達した。この遠征に参加したヴァスコ・ヌニェス・デ・バルボア（Vasco Nuñez de Balboa）は新たに建設されたサンタ・マリア・デル・ダリエンの初代提督兼総督として、一五一三年に南海の発見を目指して地峡横断の探検に乗り出した。バルボアが南海を発見したとの知らせが届いたのち、フェルナンド国王の要請でソリスの航海が企てられた。

ソリスはポルトガル人であるが、妻を殺して一五〇六年にスペインへ逃れ、のちにヴェスプッチの後任のセビーリャ水先案内人組合の組合長になった。一五〇八、〇九年にはピンソンの遠征に参加したこともある。一五一四年一一月二四日の協約にもとづいて、ソリスは南海への航海と新大陸の西海岸沿いに北上する遠大な目標に向けて、三隻のカラヴェル船を率いて、一五一五年一〇月八日サンルカール・デ・バラメーダを出航した。艤装の費用として国王が四〇〇〇金ドゥカードを（但し二分割で）提供し、残りはソリスとその仲間が出した。ソリスは一五一六年二月にウルグァイ海岸に到達し、「大きな流れ」を発見して《Mar Dulce》（淡水の海）と命名した。この流れはソリス河（Rio Solis）と呼ばれるようになり、一五三六年になってラ・プラタ河と地図に記載された。

しかし、大西洋から南海（南太平洋）へ出ることはできず、ソリスは現地で殺された。

こうして開始されたスペインのモルッカ大航海という新事業のいわば演出者として、その中心に立っていたのはブルゴスの商人ディエゴ・デ・アロとクリストーバル・デ・アロの兄弟である。兄のディエゴは一四九〇年代からアントウェルペンで、一方、弟のクリストーバルは一五〇五年からリスボンで商業と金融業を営なみ、南ドイツ商人とも接触していた。[1] リスボンは東インド貿易の根拠地であったから、クリストーバルはインドやモルッカへの航海に強い関心をもち、一五一二年（一五一三、一四年？）にエマヌエル国王の騎士（イタルゴ）ヌノ・マヌエルと共同で、のちにソリスが発見することになるラ・プラタ河の北の地域への遠征を計画した。この遠征の帰途、二隻の船のうち一隻がマディラ島に立ち寄ったが、まもなく、アウクスブルクの印刷出版業者オェグリンがマディラ島で書かれたこの遠征の様子を知らせる手紙の写しを出版した。この手紙の筆者はマディラ島に砂糖園をもっていたヴェルザー会社の現地支配人だといわれているが、彼はこの船の水先案内人であったジョアン・デ・リスボアの親友であり、デ・アロ家とも知己であった。この手紙の筆者はマラッカとモルッカ諸島とを結びつけ、それがブラジルから六〇〇マイル以内にあると考えているが、ともかくこうして、ブルゴスの商人ばかりでなく南ドイツの商人にも香辛料の島（モルッカ）への航海が関心事となった。[2]

リスボンで商売をしていたクリストーバルがスペインへ移ったのは、一つには東インドの地理にくわしいポルトガル人の水先案内人をスペインへ引抜いたからであった。この水先案内人こそあのマゼラン（マガリャエンシュ）である。ポルトガルでの生活に不満を感じていたマゼランは一五一七年一〇月カスティーリャ王に仕えるためにセビーリャに移り、トルデシラス協約でスペインに属する海域（南太平洋）を通って香辛料の島へ到達する遠征計画を提案した。地理学者のルイ・ファレイロはモルッカ諸島の五つの島のうち二つはスペイン領にあると証言し

て、マゼランの提案に根拠を提供した。一年前の一五一六年にスペイン（カスティーリャ）国王となったカルロス一世は一か月前の一五一七年九月にネーデルランドからスペインへ到着したばかりであったが、マゼランの提案を取りあげてヴァリャドリッドの宮廷で交渉が行なわれた。コロンブスの大航海にもかかわらず経済的成果（黄金の獲得）は少なく、この間に東インド貿易を開拓したポルトガルに香辛料の貿易で一歩先んじられたスペインにとって、マゼランのモルッカ大航海はいわば起死回生の国家的大事業の意味をもっていた。王室がマゼランの事業に六四五万四二〇九マラベディ（総額の約五分の四、コロンブスの第一回大航海の資金の三倍以上）という巨額の資金を提供したことからも、何とかモルッカに達して香辛料貿易でポルトガルに対抗しようという、スペイン王室の焦りにも似た意気ごみが窺える。この時、協約の締結に重要な役割を果したのがインディアス通商院の新総裁フアン・デ・アランタ（Juan de Aranda）で、彼もデ・アロ家と同じくブルゴスの出身である。

マゼランは一五一九年八月一〇日五隻の船団でセビーリャを出航、南米の東岸に沿って南下し、翌二〇年秋に南端の海峡（マゼラン海峡）を通過して、二一年三月にフィリピン（サマル島）に到着した。マゼランは現地人に殺されたが、操舵手のエルカノら部下一八名がモルッカ諸島をへて二二年九月にビクトリア号でセビーリャに帰った。彼の航海のこの経過はよく知られている。興味深いのは、この航海に対する南ドイツ商人、特にフッガーの関与である。

マゼランの航海に王室が総額の約五分の四に当る六四五万四二〇九マラベディの資金を提供したことは前に述べたが、王室以外の主要な出資者はクリストーバル・デ・アロであった。国王の秘書の証言によれば[3]、クリストーバルは友人と共同で艤装費の提供を申し出たということで、計算では一六一万六七八一マラベディ分の商品と『装備のために』追加分二六万三三四五マラベディが彼の名前で出ている。現地人と交換するための商品には

スペイン産の繊維製品や雑貨の他に、アントウェルペンで、しかも南ドイツ商人の仲介で調達した金物類（真鍮の水鉢、指環、銅貨、銅製品など）がたくさん含まれていた。クリストーバルの商品調達に南ドイツ商人、特にフッガーがどこまで関わっていたか、正確なところはわからない。しかし、のちにモルッカ航海について訴訟を起こした時にフッガーの代理人は、この時フッガー会社もマゼランの航海に出資したと主張しているし、また、マゼラン隊のエルカノが持ち帰った積荷の香辛料の大部分を後述するヴェルザー会社の代理人エヒンガーが買いとっている。

マゼランの船団が洋上を航行中の一五二〇年に、アンドレス・ニーニョ（Andrés Niño）とヒル・ゴンサレス・デ・アヴィラ（Gil González de Avila）が三隻の小船団で南米と南海を目指したが、この航海にも当事者の他に王室とクリストーバルが出資している。[4] 続いて行なわれたエステバン・ゴメス（Estevão Gomes[Estebán Gómez]）の航海にも、艤装費用七〇万二八一一マラベディのうち王室が四九万五〇〇〇マラベディを出している。残りの費用を出したのは王の顧問官二人、ガリシア提督アンドラーデ伯およびクリストーバルで、彼はこの時にはインディアス通商院の総裁になっていた。

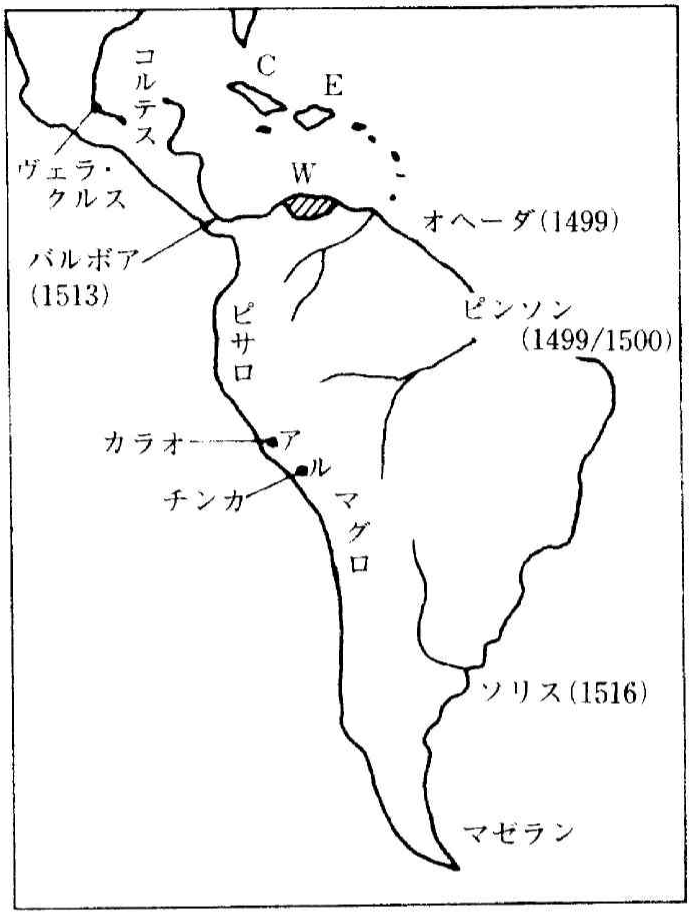
一五二五年に行なわれたガルシア・ホフレ・デ・ロアイサ（Garcia Jofre de Loaysa）の航海はもっと大規模なものだった。当初、王室はこの事業をスペイン人の資金で遂行しようとして、一五二二年一一月一三日の勅令でカスティーリャとアラゴン両王室の臣下に対して船団艤装への出資を呼びかけた。だが、ポルトガルに対抗する大船隊の準備にはスペイン人の資金だけでは足りなかったのであろう。一二月一〇日に新勅令を発布して外国人の参加禁止を解除して、南ドイツ商人に対して船団の艤装と積荷の調達への出資を呼びかけている。この勅令は特に南ドイツの豪商フッガーとその代理人を念頭において出されたものといわれる。結局、このロアイサの航海の

資金調達は総額一六六〇万一五五八マラベディのうち一、〇〇〇万マラベディを王室が出し、三一七万三五〇二マラベディをスペイン人が、四九九万八〇九〇マラベディを外国人が出資して賄われた。スペイン人の中ではクリストーバルが七〇万三〇五〇マラベディで最高額、外国人の中ではフッガーが一万金ドゥカード（三七五万マラベディ）で最高額の出資者であった。このように、この航海の資金調達でもクリストーバルとフッガーとの結びつきが重要な役割を果しており、一五一九年の皇帝選挙を境いに南ドイツ商人の中でヴェルザーに代ってフッガーがスペイン王室との間に太い絆（きずな）を作りあげた、といえるようである。(5)

ロアイサの一行がスペインを出航した直後に、セビーリャでモルッカ諸島行きの次の船団が艤装された。四隻の船団で指揮官はヴェネツィア出身のセバスティアン・カボット（Sebastiano Caboto）、資金調達は王室が一三〇万八〇〇〇マラベディ、スペイン人が三一七万三五〇二マラベディ、外国人が四九九万八〇九〇マラベディで、目標の九五〇万マラベディに僅かに達しなかった。出資者の内訳では、スペイン人の中にデ・アロのグループが入っておらず外国人の中の最大の出資者団は一五人のジェノヴァ人で、南ドイツ商人はフッガーもヴェルザーも出資していなかった。恐らくロアイサの航海が成功するかどうか、その成り行きを見守っていたのであろう。

ロアイサの航海もカボットの航海もモルッカ諸島へ達することができず、その意味では失敗に終った。ロアイサはマゼラン海峡を通って太平洋に出たのちに死亡し、そのあと指揮をとったエルカノも死亡した。カボットはロアイサのルートを通らずにラプラタ河に入り、カルカラナとパラナの合流点に城砦サンクティ・スピリトゥスを建設した。この城砦は現地人に破壊され、生存者は一五三〇年にセビーリャに帰ったが、カボットは裁判にかけられた。

カボットの船団が出航するより前に、デ・アロ兄弟の弟クリストーバルは次の船団を準備した。指揮官はモグ



C：キューバ　E：エスパニョーラ島
W：ヴェルザー会社のヴェネズエラ植民地

エル出身のディエゴ・ガルシア（Diego Garcia）で、ソリスの水先案内人を勤めたことのある者である。二隻の船で一五二七年八月にスペイン南部を出発した。艤装の費用は全部で七〇万二八一一マラベディ、そのうち王室が一九万四〇〇〇マラベディを出した。残りの出資者には顧問官が多く名をつらね、商人はインディアス通商院総裁としてのクリストーバルの他にはアロンソ・デ・サラマンカ唯一人であった。フッガーとヴェルザーがクリストーバルを通してこれに出資していたかどうかはわからない。このガルシアの航海も失敗した。

一五二七年に王室はまたしてもモルッカ遠征を計画した。指揮官にはポルトガル人のシマーノ・デ・アルカソーバ（Simão de Alcaçova）が予定されていた。クリストーバルはフッガーとヴェルザーにも出資を勧めたが、南ドイツの両社は拒否し、他の商人も出資を見合わせたので、結局、この計画は実現しなかった。その間にロアイサとカボットの遠征の失敗の知らせも入ってきた。一五二九年四月サラゴサの協約によって、カスティーリャ（スペイン）王室は三五万ドゥカードと引きかえにポルトガルに対してモルッカ諸島の領有権を譲渡した。こうして、南ドイツ商人の資金に支えられておよそ一〇年にわたって続けられたスペインのモルッカ大航海の歴史は失敗の

うちに幕を閉じたのである。

(1) 兄のディエゴ・デ・アロは一五一七年の手紙の中で、一二年前（つまり一五〇五年）にポルトガル国王がリスボンに代理人を送るように要求してきたので弟に頼んだ、と書いている。なお、一五二七年のフッガー会社の決算では、アントウェルペン支店の「資産」の「債務者」の中に大量の銅の買手としてディエゴ・デ・アロ、五八二七グルデンの記載がある。この額は同支店の債務者の中でポルトガル国王についで多い。彼は一六世紀初めにはすでに同市に相当な土地を所有し、リスボンとの商業を営なんでいた。たとえば一五〇七年に銀、銅、毛織物をリスボンへ送っている。一五一二年にブリュッセルの宮廷に一一万ポンド（一ポンド＝四〇グロッシェン）を貸しつけ、一五二一年に王室の明ばん取引の独占の請負に加わっている。R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd., 1, S. 358. 拙著『フッガー家の遺産』一四〇ページ。

(2) マラッカは一五世紀初めに建設され、イスラムの東南アジア進出とともに香辛料貿易の中心地になった。最初のポルトガル人としてロペス・デ・セクエイラが一五〇九年にここを訪れ、二年後の一五一一年にインド総督アフォンソ・デ・アルブケルケが占領した。同年、彼はモルッカ諸島の探索に小艦隊を派遣したが、艦隊はアントニオ・デ・アプレウの指揮の下に一五一二年に香辛料を積んでバンダから帰還した。こうしてポルトガルはいちはやく香辛料の島モルッカへの道を開いた。

(3) この秘書はマクシミリアーノ・トランシルバーノ（Maximiliano Transilvano）といい、ディエゴ・デ・アロの娘むこであった。また、この時のクリストーバル以外の荷主はアロンソ・グチエレス（Alonso Gutierrez）だけで、彼は一六キンタル（一キンタル＝一〇〇キログラム）の水銀と四キンタルの辰砂の荷主であった。

(4) この航海の資金は総額三七九万五八二三マラベディで、その内訳は王室が一八〇万、ニーニョが一〇八万五〇六八、アヴィラが三五万八九四一、クリストーバルが五五万一八一四マラベディであった。

(5) 皇帝マクシミリアン一世は一五一九年一月に急死し、同年六月に孫のスペイン（カスティーリャ）王カルロス一世が皇帝に選ばれてカール五世となった。この時の皇帝選挙ではカルロス一世とフランス王フランソア一世との間で、七人の選帝侯の多数を味方につけるために多額の資金が使われたといわれている。カール五世の選挙費用は八五万グルデン余にのぼったが、その中五四万グルデン余をフッガーが貸しつけた。フッガーはそれを回収する必要からスペイン王室との関係に深入りすることになった。前掲拙著、七〇ページ以下。クリストーバルは一五二三年にフッガー会社の代理

人となっている。同年三月一四日カール五世はリューベック、ダンツィヒ両市に手紙を送って、ヤーコプ・フッガーとディエゴ・デ・アロが新事業に当てる八隻の船に積むために必要な銅、帆柱、タール、ピッチ、索具その他の品を購入するように委託されたことを知らせ、両市に協力を要請した。船団艤装の費用は前記のとおり一六六〇万一五五八マラベディ、そのうち王室が一〇〇〇万、スペイン人が三一七万三五〇一（クリストーバルが七〇万三〇五〇で最高）、外国人が四九九万八〇九〇（フッガーが三七五万で最高、但しフッガー自身は一六八万七五〇〇で、残りは実際には他の商人のコンメンダ的な匿名出資）であった、とケレンベンツは書いているが、この数字は計算が合わない。ロアイサの航海については、柳沼孝一郎「太平洋への道」（共著『インディアスの迷宮』勁草書房、一九九二年、所収）を参照。

IV　スペインの「大航海」の転機

ポルトガルの香辛料獲得（東インド貿易）に対抗して、西回りで香辛料の島へ到達しようというスペインのモルッカ大航海は成功しなかった。ロアイサの航海もカボットの航海も失敗し、アルカソーバの遠征計画も実現せず、サラゴサの協約でモルッカ諸島の領有権をポルトガルに譲渡したことがその結末であった。そうしてこの頃、スペインの「大航海」（新大陸事業）の歴史は「局面の転換」を迎えたように思われる。そこで最後に、この「局面の転換」を示す二つの事実を指摘して結びに代えることにしよう。

第一は、モルッカ「大航海」の重要な資金提供者であった南ドイツの商人の動向である。南ドイツの商人の中で新大陸との貿易や植民活動に最も積極的であったのはアウクスブルクのヴェルザー会社であった。ヴェルザーはそれまでスペイン人にしか与えられなかった新大陸貿易の特権を一五二五年に獲得し、翌二六年にはエスパニョーラ島のサント・ドミンゴに支店を開設している。この支店は同社のヴェネズエラ事業の最も重要な拠点となった。一五二八年にエヒンガー（Enrique Eynguer[Heinrich Ehinger]）とザイラー（Jeronimo Sayler[Hieronymus

Sailer）は『ヴェルザー会社の名前で』王室と契約（アシェント）を結び、一定の条件でヴェネズエラ州の統治権を委譲された。エヒンガーはまもなくヴェルザーと別れるが、ヴェルザーは南ドイツの商人の中ではただひとつ新大陸の「征服と植民」の事業に乗り出したのである。エヒンガーとともにスペインでヴェルザー会社の代理人をつとめていたダルフィンガー（Ambrosius Dalfinger）はヴェネズエラの初代総督としてコロ市とマラカイボ市を建設した。しかし、ヴェルザー会社のヴェネズエラ植民事業はまもなく失敗した。[1]

ヴェルザーが積極的にヴェネズエラ事業に乗り出したのに対して、フッガーはどうだったのか。一五二七年の遠征計画が中止されたことは前述したが、その指揮官に予定されていたアルカソーバは計画を断念しなかった。彼は一五二九年に王室との間でペルー征服の契約を結んでいる。この時アルカソーバは資金が足りず、フッガー会社の代理人であったホェルル（Veit Höirl）が援助に乗りだしたようである。ケレンベンツによれば、一五三一年の両者間の契約でフッガーはチンカ（ペルー）とマゼラン海峡の間の全領域、海岸から東へ二〇〇マイル、海上のスペインの島を占領する権利を確保したが、この契約は皇帝の批准を得られなかったという。一五三四年のメンドーサ（Pedro de Mendoza）のラプラタ河地域の征服計画には、南ドイツの商人の中でもニュルンベルクのヴェルザー[2]とウルムのナイトハルト（Sebastian Neidhart）が出資したが、フッガーがこれに出資したかどうかは判らない。事業の拡張に慎重であったアントーン・フッガーは一五三九年に代理人を通してインディアス会議に損害補償の訴えを起こした。補償額には、ロアイサの航海（一五二五年）に提供した一万ドゥカード（三七五万マラベディ）ばかりでなく、他の四回の事業で約束に反して得られなかった利益の分も含まれていたという。この裁判は一五四四年まで引きのばされたが、結局、フッガーの主張は認められなかった。[3]

第二に、モルッカ大航海が失敗に終った前後から、スペインの「大航海」の歴史は当初の「発見と交換の航海」

（ラモス）の時代から「植民と征服」の時代へ移りつつあった。前述の南ドイツ商人の行動も、ヴェルザーはこの流れに乗り、フッガーは躊躇して撤退した、と言えるかもしれない。この時代の交替は資金調達の変化にも表われている。当初の「発見と交換の航海」の時代には、本国で船を仕立て、乗組員を集め、交易品を買付けて長期の航海に出なければならなかった。そのための資金をどのようにして調達したか、それが本稿の課題であった。王室をはじめセビーリャやブルゴスの商人、ジェノヴァ人、南ドイツの商人が資金の提供者として登場したのはこの局面であった。ところが、「植民と征服」の時代に入ると、征服（や新発見）は新大陸の新しい領土で富裕になった人々によって行なわれることが多くなるのである。

たとえば、一五一七年にキューバを出発してユカタン半島北部のカンペチェ（Campeche）とカンポトーン（Campotoon）に到達したエルナンデス（Francisco Hernández de Córdoba）について、年代記作者のディアス（Bernal Díaz del Castillo）は、エルナンデスは富者で『その島とインディオの人々』をもっている、と報告している。恐らく、キューバに広いレパルティミエントス（貢税と強制労働を徴発した分与地）かエンコミエンダ（委託地）をもっていたのであろう。[4] 翌年、ユカタン半島からメキシコ湾に沿って北上したグリハルバ（Juan de Grijalva）の事業は、彼を派遣したキューバの代理総督ヴェラスケスが一切の準備を行なったといわれている。メキシコのアステカ王国を征服したコルテス（Fernando Cortés）も良好な分与地の所有者であり、ダヴィラ（Pedrarius Dávila）もカスティーリャ・デル・オロの総督として恵まれた財産状態であった。ピサロとアルマグロの征服事業を資金援助したルケ（Fernando de Luque）はパナマの聖堂学校の教師で熱帯司教区の管括者であり、教父ルケの背後にはスペインの著名な銀行家の一族に属するガスパル・デ・エスピノーザがいた。一五三一年にヴェネズエラ東部の征服を試みたオルデス（Diego de Ordez）もメキシコにもっていた委託地のおかけで準備を賄うことができた。

以上の事例は必ずしも網羅的ではないが、現地で成功した富裕な者によって新大陸の征服事業が盛んに行なわれるようになったことは、スペインの「大航海」（新大陸事業）が新局面を迎えたことを示すものであり、スペイン本国における「大航海」の資金調達の問題が一段落したことを表わしているように思われる。

（1）ヴェルザーのヴェネズエラ植民地からオリノコ河上流の奥地に五回の遠征が行なわれた。Ehinger 1531/33, Federmann 1530/31, Hohermuth 1534/38, Federmann 1535/39, Philipp von Hutten 1541/44 である。ヴェルザー会社のスペインにおける代理人はエヒンガーとダルフィンガーであった。エヒンガーはコンスタンツ生まれ、最初サラゴサで代理商をつとめ、皇帝選挙の資金調達にも働いた。騎士団領の請負（一五二八―三二年）、エスパニョーラ島へのドイツ人鉱夫の派遣、奴隷の調達、新大陸の貴金属の熔解などを引受けたが、最大の契約はブルゴス商人でサンタ・マリア州総督のガルシア・デ・レルマと結んだヴェルザーのヴェネズエラ植民事業に関する契約（一五二八年三月二七日）である。カール五世の会計官（一五三〇年）、サンチアゴ騎士団の騎士（一五三五年）となり、カールの宮廷の貴人であった。当時スペインにいたドイツ商人中最も活動的で影響力も大きな商人であった。子孫は奴隷貿易にも関わっている。*NDB*, Bd. 4, S. 344.

（2）アウクスブルクのヴェルザー会社の当主であったアントーン・ヴェルザーの弟のヤーコプ・ヴェルザーは、同社のニュルンベルク支店の責任者であったが、一五一七年に兄と別れてニュルンベルクで独立した。これがニュルンベルクのヴェルザー会社で、資本金は一五二七年六万六〇〇〇グルデン→一五四三年二四万三〇〇〇グルデン、ジェノヴァ、アドラー、ヴェネツィア、ミラノ、アントウェルペン、リヨン、ウィーン、シュラッケンヴァルド（ボェーメン）に支店を開いた。商品取引を主として営業を拡大したが、堅実な貸付の家訓は崩れ、スペイン王室やフランス王室へも貸付けている。R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd. 1, S. 197f.

（3）フッガーは「征服と植民」の事業には進まなかったが、一五一九年の皇帝選挙に当って貸付けた資金のかなりの部分をスペインで回収しなければならなかった。カルロス一世（カール五世）の管理する三つの騎士団領（サンチアゴ、カラトゥラヴァ、アルカンタラ）の地代を返済に当てる領地の請負、いわゆる「マエストラスゴ」（Maestrazgos）はそのために始まった。一五二四年二月に締結された契約にもとづいて一五二五年から一六二四年まで二度の中断（一五五七

一六二年、一六一五―二四年）を含んで続いた。この他、スペインが新大陸から獲得した貴金属も返済に当てられ、こうしたことのために、スペインにおけるフッガーの営業は宮廷との折衝、騎士団領の管理、新大陸の銀をめぐるセビーリャ支店の開設と拡がっていった。スペインにおけるフッガー会社の代理人の最初はW．ハラー（一五一六年初出）で、以後、G．ライイング、V．ホェルル、K．ヴァイラー、S．クルツ、J．シュテヒャー、H．フォン・シューレン、H．シェドラー、ch．ライザー、ch．フッガー、J．ヴァルター、ch．ホェルマンらの名前が出てくる。H. Kellenbenz, *Die Fuggersche Maestrazgopacht* (*1525—1542*), 1967; Ders., Die Rolle der Verbindungsplätze zwischen Spanien und Augsburg im Unternehmen Anton Fuggers, in: *VSWG.*, Bd. 65, 1978; Ders., Die frühen Bankgeschäfte der Fuggerschen Faktorei in Sevilla, in: *Revue Internationale d' Histoire de la Banque*, 8, 1974.

（4）「レパルティミエントス」(Repartimientos, 語義は分与）は征服した部将にその土地と住民を与え、貢税と労働を獲得させる制度で、本国の国土回復運動の際に用いられたといわれる。原住民搾取の残酷さに対して強い反対が起こり、エンコミエンダ制に移っていった。「エンコミエンダ」(Encomienda, 語義は委託）は征服・開拓者に対して国王が与えた土地で、原住民の保護を義務づけていた。しかし、この義務が必らずしも履行されなかったことは周知の通りである。